

# AMCoR

Asahikawa Medical University Repository <http://amcor.asahikawa-med.ac.jp/>

看護研究集録(2013.12) 平成24年度:26.

乳房温存手術後、放射線療法による放射線皮膚炎を発症した患者への  
看護実践に関する調査

野中 雅人

## 乳房温存手術後、放射線療法による放射線皮膚炎を発症した患者への看護実践に関する調査

野中雅人（旭川医科大学病院）

### 【目的】

乳房温存手術後、残存乳房に対し実施される放射線療法によって、多く認められる有害事象は、放射線皮膚炎である。放射線皮膚炎は、発生を予防する事は困難だが、看護支援により進行を遅延させることができる。症状の早期発見には、毎日の観察が重要であるが、放射線治療部門に専属の看護師を有する施設は少ない。A病院では、毎日担当看護師が皮膚症状の観察や衣類調整などを実施している。そこで今回、A病院の放射線治療部門における看護実践の現状を調査し、今後の課題について示唆を得ることを目的に本研究を実施した。

### 【研究方法】

研究対象：乳房温存手術後、放射線療法を受ける患者 88 人（4MVX 線 50Gy/25 回処方）。調査期間：2010 年 6 月から 2011 年 5 月まで。データ収集方法：外来カルテや電子カルテから属性、症状、看護実践内容、患者の方略を集計。データ分析方法：属性や治療終了時の皮膚炎 Grade（CTCAEv4.0 以下 G と記す）などの項目を単純集計にて分析。倫理的配慮：A病院の学問、研究目的での情報使用に関する同意書にて説明し同意を得た。

### 【結果】

年齢は、平均 56.5 歳。通院 88 人（うち近隣病院より 21 人）。専業主婦 71 人。職業あり 17 名。治療終了時の皮膚炎 G1/28 人・G2/60 人。専業主婦 G1/24 人・G2/47 人。職業あり G1/4 人・G2/13 人。看護実践内容は、照射野の説明、マーキングや皮膚保護の説明、衣類調整、入浴方法の説明などだった。衣類調整については、皮膚刺激の少ない綿素材の衣類を説明し、全ての患者が着用に至っていた。また早い時期に皮膚炎 G2 に至っている患者ほど、治療参加意欲が低く、説明回数が多い傾向が認められた。患者の方略は、衣類の工夫や脇をあけるなどだった。

### 【考察】

A病院では、プランニング時と治療初回に必ず下着の説明を行っている。しかし治療参加意欲が低い患者は、G2 群に多く、このような結果からも患者の治療参加への支援は重要であることが考えられた。A病院は、4MVX 線を使用しているため、6MV の施設より皮膚炎のリスクが高いと考えられる。しかし 28 人が G1 であった。先行研究では、摩擦軽減により皮膚炎の進行を遅延させることが出来るとの報告がある。本研究においても、職業を持たず、入院や家族の協力により家事を免除された患者は、照射野への皮膚刺激が少なく、皮膚炎の遅延が認められた。全患者が綿素材の衣類を着用していたが、さらに脇をあけるなどの患部の摩擦を避ける患者の治療参加が必要であることが示唆された。看護師により早期から行われる衣類調整は、素材による皮膚への影響を減らす効果と共に、患者の治療参加を促す一助として認識すべきと考えられた。